

Title	斯道文庫蔵『翰林辞』解題と翻刻
Sub Title	An annotated transcription of Kanrin-ji housed in Shido-bunko
Author	堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2026
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.60 (2025.) ,p.101- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20250000-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵『翰林辞』解題と翻刻

堀川 貴司

本書は、『作文大体』の一伝本と見られるものであるが、書名を含め増補改編が甚だしく、中世における同書の受容を知る上で興味深い内容を含んだものである。

簡略に書誌を掲げる。

翰林辞一九卷

和大一冊

919
ト230
1

闕名者撰

寛文一二年（一六七二）一二月写（杲快） 転写五条為庸筆本

東寺観智院旧蔵

原縹色無地表紙（二七・五×二〇・五糎）、五つ目綴。原左

肩無辺題簽に墨書「翰林辞」（本文と同筆）。右下に墨書識語「観

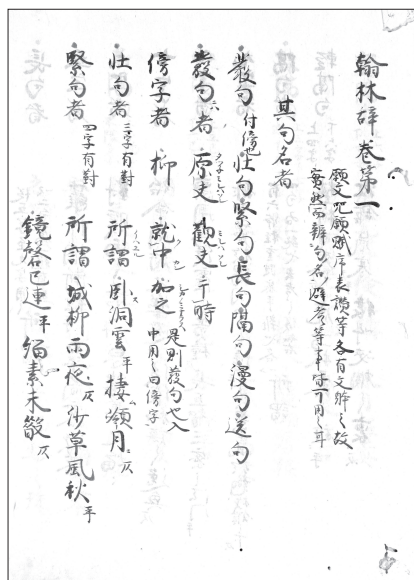
智院」。前後遊紙各一丁。無辺無界九行三字前後、注小字及行、墨返点・送仮名・豎点、朱合点。字高二・八糎、字幅一六・八糎。

卷一首「翰林辞卷第一」とある他は、卷首卷数のみ。卷尾は卷四まで卷数のみ記すが、「卷第一終 卷第二」の如く巻尾題に続けて同行に次巻の巻首題を記す。卷五以下は巻首題のみ。墨付全三〇丁。

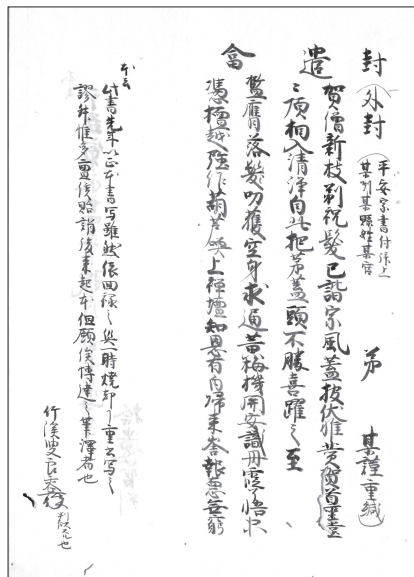
一一ウ冒頭（卷十末）本奥書A：

本云、得度転之説本、致推量之罵切。於愚儒之舛誤、侯君子之添削耳。

三〇才末本奥書B



巻首



巻尾および本奥書B

〈本云〉／此書先年以正本書写、雖然依回禄之災、一時焼却了、重書写之。／謬舛惟多、晝侯貽誚。後來起本、但願俟博達之筆沢者也。／竹溪叟良容（花押）〈判似スル也〉

三〇ウ冒頭本奥書C..

〈本云〉／于茲寛永十四年臘月 日書写畢／拾遺菅判裏見返書写奥書..

寛文十二（壬子）年五月廿三日以五条黄門為庸卿／所持本馳筆了／（同廿五日一校了／八月七日二交了）／権大僧都某快

Aの「説」は「証」の、Bの「起本」は「起者」の誤写か。Aの記述からは、本書の親本あるいはその前段階で、転写の過程に起こる誤脱が多かったことがわかる。

Bの「竹溪叟良容」（谷の字難読）は、一見禅僧の名前ように見えるが、A・Bを一連のものとすると、Aで自らを「愚儒」と称していること、落款とともに花押を用いるところから、博士家の人物とも見られよう。一方、Aは巻十一冒頭および巻十

三末尾の奥書めいた文章と同一人物の手になるもので、Bとは別人（Bの前段階のもの）とも考えられる。ここでは判断を保留し後考を待つ。

本奥書Cの筆者は、書写奥書にあるように紀伝道管原氏の五条為庸で、『公卿補任』承応三年条によれば寛永八年（一六三二）一二月に從五位下侍從、同一〇年正月に從五位上、同一四年正月に正五位下となっているが官職は侍從のまま、「拾遺管」と自称するにふさわしい。

書写者の杲快（一六三四～一七〇八）は東寺観智院第十二代院主で、『作文大体』最古写本として知られる天理図書館蔵観智院旧蔵本にある宝永元年八月（一七〇四）の修復識語を記している。他にも、広島大学文学部国文学研究室蔵『蘇悉地羯羅供養法』の寛文六年（一六六六）八月修復識語（松本光隆「平安鎌倉時代における蘇悉地羯羅供養法の訓読」、『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』汲古書院、二〇〇七、第五章第三節）などを含め、同院旧蔵・現存の聖教の保存修復を中心に、同院の発展に尽くしたことで知られる（西弥生「中近世における東寺観智院の存続と発展」『密教学研究』五一、二〇一九・三）。大東急記念文庫蔵元至正二十五年（一三六五）刊『景德伝灯録』に

は、本書が観智院初代杲宝の『開心鈔』にたびたび引用されているので入蔵すべきだ、との知人の言を容れて彼の蔵書を譲り受けた旨の、寛文十三年（一六七三）四月の識語を記すなど、おそらくは伝来の聖教類のみならず、幅広い蔵書の形成に貢献したもので、本書書写もその一環と位置付けられるであろう。『作文大体』諸本にない特徴は、細かな巻立と、末尾部分等の増補である。まず、巻毎の内容を掲げる。文（詩）・筆（四六文）の別および冒頭に全体を表す名称を掲げる場合はそれも示す。

卷一・筆…四六文の句名一覧およびその例文

卷二・文…「作文大概（文筆）詩体（有呂律呂部）」雑体詩

卷三・文…「（同右）（律部）」句題詩・無題詩等

卷四・文…題・韻

卷五・文…詩病

卷六・文…懷紙作法のうち端作

卷七・文…懷紙作法のうち本文、披講

卷八・文…聯句

卷九・文…対句

卷十・文…「分字部類事」

卷十一・文…句題詩作法

卷十二・文…対句の細かな具体例

卷十三・文…同前

卷十四・筆…「賦事」四六文の句名一覧およびその例文

卷十五・筆…「雑序賦」句末に焉・矣を置いて平仄を整える

こと（句題詩についての一文混入）

卷十六・文…韻律、「四韻句事」「双貫事」

卷十七・文…「詩六義部」

卷十八・文…詠史、山寺会、詩病、返音、義対

卷十九・筆…「四六文章体」「四六文章体格」「助字隔于字体

類」書簡作法

これと小沢正夫「作文大体の基礎的研究」〔『説林』一一、一

九六三・九〕において示された「作文大体内容一覧表」と対照

させると、卷二…5雑体詩（例詩異なる）、卷四…6詩雑例の

うち韻に関するもの、卷五…2のうち「詩病」、卷十一…十二・

十三…6詩雑例のその他の部分、卷十四…3筆大体、卷十五…

33雑序賦願文等有二病+群書類従本等の3末尾にある焉・矣字

を句末に置くことについての文章、卷十六…2十則の一部、卷

十七…27六義、卷十八…2十則の一部、となる。

卷九は11文章有十二対と重なる内容であるが、「用対事」に

「文筆同じく之を用ゐる」（原漢文。以下同）と注記することから、文・筆ではなく、卷八に続いて聯句に関原漢文、以下同じの記述とわかる。卷十も同様で、この二巻は何らかの聯句作法書を参照した可能性があろう。

さらに、卷一・卷三・卷六・卷七・卷八は、鎌倉中期成立の『王沢不渴鈔』の記述を大幅に取り入れているものである。詩体の呂律の二部に分けることもそうだし、本来「文」であるはずの前半冒頭卷一に「筆」の対句の説明が出てくるのも、同書が作法の説明を四六文の形式で行っており、その冒頭である卷上の句題詩に関する説明部分に、対句各種の説明を同時に行っていて、それを抽出したものと思われる。

すなわち、独特の叙述方法を持つ『王沢不渴鈔』から、『作文大体』に記述のない部分を抜き出して合体させ、両者の情報を統合しようとしたことが見て取れる。

用いられた『作文大体』は、観智院本にはない11、観智院本・東山文庫本にはない27・33を含んでいる、群書類従本などの増補本である。古態諸本にある2についても、群書類従本等で増補されている部分を含む。本文中にも、「古は破題・譬喩の二句の体差有り。今来は差別無し」（卷三、四ウ）、「後京極殿（九

条良経)の時、句題に韻を勒して用ゐる会之れ在り」(巻四、七ウ)といった、平安時代とは異なる状況を示す文言が見られる。

さらに本書独自の増補として、巻十九の存在がある。

「四六文章体」(一九ウ―二二ウ)は、北村澤吉『五山文学史稿』(富山房、一九四二)第二篇第一章第八節に引かれる「虎関四六式」とほぼ一致する。この文章は、その後四六文作法書が成長していくなかでも引用されているほか、『心田詩藁』(続群書類従)末尾の「文章指南」ともほぼ一致するものなので、本書編者はそれらのどれかを目にして取り入れたのであろう。

この例句には、本書では省かれているが、『本朝文粹』や『賦譜』、さらに円仁「寂光土記」から引かれたものもあり、顕密仏教に通じ、博士家との接触も多い虎関の教養を反映したものととなっている。なお、巻一の疎隔句の例句は、もともとこの「虎関四六式」で十字の長句(単対)の例句であったものを転用し、巻十九では省略している。つまり、単純に巻十九を付加しただけでなく、例句の入れ替えも行っていることになる。

「四六文章体格」(二二オ―二八オ)は、福嶋俊翁『虎関』(一九四四初刊、著作集第二巻所収、木耳社、一九七四)に引かれる「秉弘語式」、すなわち虎関師録(一二七八―一三四六)自

身の秉弘式の文章そのものである。謝詞中に「恵日之光、至七葉而増耀」(二三ウ一行目)、と恵日山東福寺第七世無為昭元への褒辞が含まれているように、虎関は徳治元年(一二三〇六)、無為会下にて蔵主となり、結夏に秉弘を遂げ(『海蔵和尚紀年録』)、その後円覚寺においても行っている。その全体は、彼の語録である『虎関和尚十禅支録』末尾に収録されている(国会図書館蔵慶安四年(一六五一)刊本参照)が、そこでは句ごとの分かち書きや対句の種類の注記等はないので、「秉弘語式」を参照したものであろう。

「助字隔于字体類」は明確な出典を見いだせないが、『大日本史料』十二之三十二、元和五年(一一一九)十二月十九日条、直江重光(兼統)卒去記事に引かれる南化玄興撰『文鑑』(大日本古文書『上杉家文書』二、では「南化玄興文鑑写」という書名になっている。重光筆の写本)に類似の記述が見られ、『古今韻会举要』等を利用して作られた、五山における初心者のための手引書の類からの引用である可能性が高い。

最後にある書簡作法も、五山で行われた啓札(少年僧に対する儀礼的な書簡、四六文で記される)に関わるものであろう。このように本書は、平安時代以来の伝統である王朝漢詩の作

法書の代表的な存在『作文大体』が中世に入って増補され、そこに真言宗僧による新たな作法書『王沢不渴鈔』を利用した増補が加わり、最終的に五山文学との接触でさらなる増補が行われた、特異な様相を示す伝本である。虎関の著作の成立、すなわち鎌倉末南北朝以降で、おそらくは室町時代、公家と五山の文化的な交流が深まるなかで生み出されたものであろう。

〔翻刻凡例〕

＊常用字体を用い、句読点・中黒を補う。なお歌・哥・調、氣・糸の別は残した。

＊訓点はそのまゝ翻字するが、豎点は省略する。

＊全体に、内容と無関係の恣意的な改行や大字・小字の区別等が行われているので、それを適宜変更して通説の便を図る。なお、小字にすべき部分はへで括る。

＊第一二丁と第一三丁は錯簡とみられるので、正しい順序に変更する（本文中の表示はもとのまゝ）。

＊他本や出典を参照するなどして、明らかに誤脱と判断されるものについては、（ ）内に傍注訂正を、〔 〕内に補足を行うが、同意の別字はそのまゝとした。正しい形が推定できない場

合は（ママ）を付す。なお、（ ）を付さない傍注は底本にあるものである。

〔翻刻〕

翰林辞卷第一

願文・呪願・賦・序・表・讚等各有文体之故実、然而辨^二句^一名^一避声等事皆可用之耳。

其句名者、発句（付傍也）・壮句・緊句・長句・隔句・漫句・送句。

発句^{ニハ}者 原^{タツネミレハソレ} 夫^{ミレハソレ} 観^{ミレハソレ} 夫^{ミレハソレ} 于^{ミレハソレ} 時^{ミレハソレ}

傍字者 抑^{就^レ中^{カン}} 加^{シカノミナラス} 之^{シカノミナラス}（是則発句也。入中用之曰

二傍字一

壮句者（三字有对）所謂^{イハユル} 臥^ス 洞雲（平）棲^ム 嶺月^ニ（仄）

緊句者（四字有对）所謂 城柳雨夜（仄）沙草風秋（平）

鏡^ハ 磐^ハ 連^ハ（平）縑^ハ 素^ハ 未^ハ 散^ハ（仄）（1才）

長句者、従五字至九字用之。以二句為一絶、有对。所謂

五字者 籬竹煙漸輕（平） 阜蘭露欲落

六字者 对暖雨之蕭々（平） 思濃華之焰々

七字者 始命周詩之樂遊（平） 後催和調之逸興（仄）

八字者 稟周旦漢霍之貴種〈仄〉長五智三密之法門〈平〉
九字者 排甲第於陽明里之傍〈平〉賞景氣於翹材館之下〈仄〉
隔句者、有六体。輕・重・疎・密・平・雜也。各以四句為一絕
也。去声之樣如右。所謂

輕隔句〈上四字下六字〉野村^ニ日暮^テ〈仄〉鹿鳴林露之程^ニ〈平〉

江館風寒^テ〈平〉猿叫峽煙之裏^ニ〈仄〉(1ウ)

重隔句〈上六字下四字〉唐堯節儉之構 林月照莫

白氏窮老之栖 山泉注石

疎隔句〈上三字下七字、或下多不限〉赴之者 超八之醞釀為糧

尋之者 唯一之宝車為乘

密隔句〈上五已上、下六已上〉桃李不變也 一色二香之理焉

煙霞凝然也 無采無去之相矣

平隔句〈上下均平、不限多少^(少カ)〉雖示八相 本是久成〈平〉

雖^レ唱減度^ヲ 実亦常住

林花散春梢^ニ〈平〉翻曼荼之^{ハナフサ} 蔓^ヲ〈仄〉

池月澄^ニ秋水^ニ 瑩頗梨之珠^ヲ (2オ)

雜隔句 樂^ノ感^{コト}形骸^ヲ〈平〉觀客連^テ而成^ス舞^ヲ〈仄〉

榮均草木^ニ〈仄〉 秋^ノ色^変而為春^ト〈平〉

下実報方便之他鄉^ニ 機^宜宣^應応^転 (息カ)

出界内同居之余國 利物結縁^ス

已上隔句、片句多字、定不^レ可^レ余^ニ廿字^ニ也。

漫句者〈不對句〉所謂 視聽之所^ヲ觸 無^ニ不催^ニ感思^ヲ哉 等也。

送句者 所以者^ノ也 而^ニ已^ニ哉 等是也。

又已上句避^レ声^ヲ。不^レ叶^ハ之時用^ニ焉矣^一也。

卷第一終

卷第二 (2ウ)

作文大概〈文筆〉詩体〈有呂律。呂部〉

呂者 古調・新調・廻文・離合・字訓・越調・江南・曲体。呂

部、声韻不^レ直^ヲ、曰^ハ呂^ト。

古調・新調者、付呂調^ニ詞也。呂詩之中^ニ声韻直^{タ、シキヲ}云^ニ新調

一、声不直云^ニ古調^一。廻文等ノ詩^ニ可^レ通也。

廻文者、上ノ句、首^{ハシメ}字下ノ句、終字用韻^ヲ也。順逆行^{ツラナル}、共

被読故也。所謂

極^テ望^ヲ春水碧 通聽^ヲ曉風清〈韻〉

北塞^ニ歸鴻遠 中庭老鶴鳴〈韻〉

離合者、上下句首字有曲。所謂取上句首字篇用下句之首字也。

所謂

霞ノ光曙^ア後望無極 雨ノ足夜來夢不^ス長

鶴舞^テ嵩山^ニ春日靜^{ナリ} 鳥譚^テ花樹^ニ晚風狂^ス

字訓者、毎^レ句合^テ初^ノ二^ノ字^ヲ成^ス句^ノ終^ノ字^一也。所謂

山喬^テ通^レ跡^ヲ嶠^シ 石^ハ少^レ帰庭^ニ砂

人立^{テハ}列依^レ位^ニ 吾行^ハ路赴^レ衙^ニ (3才)

越調者、必^ス絶句^ニ作^レ之^ヲ。第三^ノ句六^ノ文字^ヲ用句^ノ中^ニ对、

毎^二句^一終^一居韻^ヲ也。所謂

処々放遊与不空^{〈韻〉} 花前置醉^{酒酔カ} 和風^{〈韻〉}

横東虹^{〈韻〉} 帰北鴻^{アリ} 春日眺望測伴同^{〈韻〉}

江南曲体者、以^レ四韻成^ス一首^ヲ。句ノ字数不同也。第二・第

三句^ト对^之、故第三句之終居韻^イ也。所謂

憶龜山^ヲ々々勝俗寰 洞花雪脆春望白^シ 溪葉霜深秋路斑

豈不憶^二龜山^一

卷第二終

卷第三

作文大概^{〈文筆〉} 詩体^{〈有呂律。々部〉}

律者 句題・双貫・無題・非句題・賦物・經題・詠史・山寺

会・贈答・偶喩。律者、声韻不^レ謬云律。

句題者、以五言ノ詩一句ヲ為題^ト。上下ノ句随^テ時^ニ、所謂春作四時ノ始、上ノ句ノ題也。(3ウ)

発句^{〈上句〉}又題目 ○平々仄々平韻 ○仄々平韻

胸句又破題 ○仄々平々仄韻 ○平々仄韻

腰句又譬喻 ○仄々平々仄々 平々仄々○

落句又述懷 ○平々仄々平韻 仄々平韻○

題目・破題・譬喻・述懷、此体之名專付序体二名目也。已上二四不同・二六对・(4才)三連・居韻之字樣也。六韻・

八韻・十韻・十二韻・百韻等可^レ准^ニ知之^一。

発句、述一首之大綱^ヲ、不用对^ヲ也。以^テ句題五ノ文字^ヲ散在

シテ置^ク処々^ニ也。

胸句者、述題之意、比類述也。可用对也。

腰句者、同上ノ句ノ体^ニ、古ハ破題・譬喻二句体有差^{シテ}。今来

ハ無^ニ差別^一、以^テ尋常ノ句^ヲ為^二腰ノ句^一、此故実也。

落句者、不^レ用对^ヲ、総別^ニ述懷^{オモイ}句^ヲ (述^{オモイ}懷^力)。総ハ

者凡身之有樣等也。別者、付^二令題^力有^一感興由也。已上

句題一首樣也。所謂

春作四時始^{〈各分一字〉}

算^カへ取^二四時ノ十二廻^ヲ 以^テ春ヲ為^レ始樂先^ツ催^ス

節存^テ次第^ヲ東風起^ニ 梅^ハ是最兄上月^ニ開

青帝迎^テ年^ヲ施^ス木德^一 玄英改^テ律^ヲ動^ス葭灰^ヲ

誠知^ヌ玉燭調和^{シテ}後^ニ 霜草自^レ今任^ス往來^ニ

双貫者、付^テ句題^ニ有同類^ノ之量字、名^ニ双貫^一。所謂東西・

遠近・視聽・竹樹・野沢等也類。付^テ此題^ニ聊有作骨。所謂

以^テ量字^ヲ分句句作也。(4ウ)

野沢^ニ始^テ迎春^ヲ〈便^ノ字〉

野中沢畔何傾^レ樂^ヲ 更送^テ三冬^ヲ始^テ屬^ス春^ニ

雲夢徑紅^{ナリ}花^ノ綻^{フル}曉^ニ 洞庭沙綠草^ノ抽辰

鞭^テ馬^ニ行々^{トシテ}為^ス歷覽^ナ 出溪啼鳥^ハ似^レ呼^レ人

無題者、非句題総而曰無題。山寺会類也。

子^ネノ日野遊〈同〉

東郊^ニ雪尽^テ天徐^ヤ暖^{ナリ} 策^テ馬^ニ飛軒^ル興不^レ空

立^テ倚^テ老松^ニ携白露^ニ 坐^テ茗^{エラ}若菜^ヲ就^ツ春^ニ叢^一

時迎^テ子^ヲ日^ヲ羈遊々^ニ 源起我朝習俗風

人慣長生^ヲ交會^ノ処^ニ 醉來^ハ弥樂^ム野煙^ノ中

非句題者、四字題也。依^レ非^ニ句題^一曰^ニ非句題^ト也。題ノ字胸

腰等ノ句不^レ憚^{ハ、カフ}作^ル也。

賦物者、賦一字題也。百詠詩等是也。又三字有之。(5オ)

賦^ル秋^ノ旅^ヲ詩〈同〉

遊子三年^ノ行^ニ 征人一曲^ノ歌

秋風盈^レ袖渡^ル 故園^ニ遠情多

經題者、取^テ經^ノ一句^ヲ為^ス歌^ト也。謂^ニ之^ヲ釈教^ノ詩^ト

唯有一乘法〈舍利報恩作也〉〈同〉

十方ノ仏土余經^ノ裏^ニ 妙法^ノ真文独有^レ差

無二無三唯一^ノ教^ニ 非羊非鹿大牛^ノ車

衆星掩^レ影^ヲ円融^ノ月^ニ 諸樹慙^レ薰美相^ノ花

可^レ悅釈尊留^ル舍利^一 鶴林^ノ春雪^ハ幾^ノ煙霞

詠史者、取^テ史書文^ヲ為^ス題^ト也。乃至人ノ名等也。

賦^ス上陽人^ヲ

六十年来幽閉女 宮門^一鎖^テ又何行^{ユカシ}

紅顏^{ムカシ}在昔鏡中^ノ媚 白髮只今頭上^ニ生^ル (5ウ)

曉雨滴添懷^レ旧淚^ヲ 秋燈挑尽^ス送^レ宵情

兩眉細^{ホソ}画^{シテ}衣裳窄^{スホシ} 莫^{ウトキ}見^レ外^ヲ人^ヲ齡漸傾

山寺会者、詩、古寺臨^ニ其処々^ニ作^ニ彼景氣^一也。諸ノ名所・

別業・閑居等可准^ニ知^一之^ヲ也。

春日於來迎院^ニ即^ツ事^ニ〈同〉

洛陽城^ヲ北大原^ノ中^ニ 有^ニ道場^一異俗門^ニ

庭草雨過^テ春露重 洞花風定^テ白雲閑

寺^ハ、伝龍象幽居^ノ地 隣^ハ、卜陳隋旧跡山

水石煙霞看未飽 留連^テ終日欲 何還^{ラント}

贈答者、自^レ、許送^レ詩之時^ハ、返答之云也。不^ニ避彼^ノ、人作之韻^ヲ用^レ之時^ハ、心押本韻^ヲ・答繼^ニ本韻^一、如此可^レ書之^ヲ。雖^ニ何度^ト常用本韻也。又用他^ノ韻事在^レ之。端書本体不委書、但随体為有^レ興多書之^ヲ在^レ之。

頃^ハ、日右將軍翫^ニ三冬之景^一、^{氣ト同}、呈^{アラハス}六義之篇章

一、見^{コト}之^ヲ、錦繡遮^レ眼^ニ、読^レ之金玉有^レ声、不^ニ（6

才^一）能^{モタ}黙^{シテ}止^{ムコト}、敬^テ押^ニ本韻^一而已

一、排^{ヲシヒラ}、疎牖^ヲ遙^ニ瞻望^ス 風葉飄零^ス秋後^ノ林

月色^ハ、来崑岳^ノ玉 松声^ハ、在昔楚台^ノ琴

盛衰無主生涯夢 禍福在時人世^ノ心

慘膽洞雲飛散^{タシ}雪 冬^ノ天景^ヲ茫望難禁

閑中偶吟等者、無題、述懷旧也。

桃李色々雖^{アリ}識^レ境^ヲ 無詩酒友与今空

二句無^ニ二官猶淺^一 三月^ノ初三花独紅^{ナリ}

停盞^テ先思巴字^ノ水^ヲ 閣^{サシ}レ^{ヒテ}毫^ヲ偷^ニ恥魏文^ノ風

詩驚舞蝶抛吾否 春意^ハ、不来学牖^ノ中

卷第三終

卷第四

題用意事 付^テ題^ニ有虚実、繫^テ風月出^レ之^ヲ曰^ニ虚題^一、付史書、奥理^ニ出^レ之^ヲ曰^ニ実題^一也。

付題注事 付^テ題^ニ取韻^ヲ 各^ニ分一字^ヲ 便字^ハ、勒^レ韻^ヲ等也。（6ウ）

付韻者、寄^テ當題意^ニ以艶韻^ノ字^ヲ以其^ノ字^ヲ為付之也。飯令有月題^ニ、明^ノ字、若有風涼等也。所謂

松竹春増^ス色^ヲ 以榮為^レ韻

余可准^ニ知之一。得^テ此^ノ題^一作詩之時、大旨以^テ付^レ字^ヲ用

二發句^ノ韻^ニ、下^ヲ胸^ノ字^モ事^ス之也。

一題中取韻者、於^テ二所^ノ題^ス五字^ノ中^ニ、平声^ノ字及三字^ニ之時、

用^ニ此註^ヲ。所謂

春^ハ、生^マ哥^{（マカ）}中 題中取^レ韻^ヲ

得^ニ此^ノ題^一作詩之時、三時若四字中随^ニ一韻^ヲ、彼、

用韻之字^ヲ必用^ニ二發句之韻^一。題目^ノ字^{ナル}故也。

各分一字者、難題之時多用^ニ此註^ヲ。平声^ノ卅二韻之中^ニ随作

者意随^ニ一可^レ用^レ之云也。所謂

春^ハ作四時ノ始 各分一字^ヲ

得^ニ此題^ヲ一作詩之時^ハ、「春ノ日同賦^ス春^ハ作^ニタリト云^フ」四時ノ始^ニ詩各分一字探得其字^ヲ、或「春ノ日同賦春作四時ノ始各一字詩探得其字^ヲ」如此書也。探得其字^ヲ者、各ノ中ノ用此韻^ヲ云心也。此字又大旨發句ノ韻^ニ用之^ヲ。又用胸腰之ノ間^ニ自落句ノ韻用^レ之^ヲ也。

便字者、当題五字之終^ニ有平声之字時、幸^ニ叶^ニ題^ノ心^ニ有^テ艷字之時、便^ニ以^ニ其字^ヲ為^レ韻^ト付^ル也。所^ニ（7才）謂^ル

野沢始^テ迎^レ春^ヲ 便^ニ以^ニ春^ヲ為^レ韻^ト

得^ニ此^ノ題^ヲ一作詩之時、以^ニ後^ノ字^ヲ用^ニ發句^ニ韻。題目ノ字^{ナル}也。

勒^{ロク}韻^ヲ者、山寺ノ会等無題之時用^ニ此^ノ事^ヲ。四韻・六韻等連^テ韻字^ヲ出^ス之如次。以^ニ後^ノ字ノ韻^ヲ付^ニ常景氣^ニ繼^ニ上詞^一也。後京極殿之時、句題^ニ用勒^{シテ}韻^ヲ会在^ニ之。作^テ此詩^ヲ一書^ヲ之時

春ノ日於山寺^ニ召^ル事^ニ勒

如此於端書下^ニ付^ニ勒字^ヲ一也。

絶句者、通句題・無題・呂律詩一体也。大旨祝言^ニ用^レ之^ヲ。所謂作文始・新亭ノ会等、四韻ノ詩之發句・落句^ニ韻也。若^シ用^レ對^ヲ時、發句對^レ之也。

卷第四終

卷第五

詩字數事 四言・五言・七言・八言、古作ノ中^ニ皆有^ニ此數^一。常途^{ニハ}五言・七言用^レ之^ヲ也。

詩病事 平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・小韻・正絶^{（正カ）}・傍紐・秘府論等^ニ雖^レ有^レ多種、常^{ニハ}避^ニ八病^一。近来（7ウ）避八病事、試^ノ詩答^{（答カ）}ハ放鳥之外不^レ避^之。於常途之時^ニ者、大韻・小韻・三連・捻^ニ四病可避^之也。

大韻者、以^テ当用一韻ノ字^ヲ於一首ノ中不^レ可^レ用^ニ他處^一也。

小韻事、四韻・六韻等正当作之面^ニ所ノ居韻ノ字他處^ニ不^レ用^レ之^ヲ也。

三連者、一首七言・五言之中^ニ、自下三字不同声、上下ノ同^ク句可^レ避^レ之^ヲ也。

捻二者、二四不同二六對等違^{（タカ）}レ声^ヲ、名^テ為^ス捻^{（ト）}。此ノ外連綿ノ病尤可^レ避^レ之^ヲ歟。

連綿^{（ト云ハ）}者、每句行横同通不用天象地儀ノ等ノ字也。此病者、連句之時可^レ避^レ之。但四句無憚。四句者^ニ韻也。於^レ詩者猶可^レ憚^レ之也。

○〈天象〉○○○○○ ○〈天象〉○○○○○
○〈天象〉○○○○○ ○〈天象〉○○○○○
已上二通皆天象。二通已上可_レ准_二知之_一也。

卷第六（8才）

許同字事 四韻之時、発句落句之間同字用之無憚。六韻已上詩同字三字許之也。

詩書様事 七言陪_テ心_ス製_ニ・心_ス令_ニ・心_ス教_ニ一首乃至官姓。

先付端書、名朝臣上字等ノ事随_レ処_ニ可_レ斟酌。

七言字者、序者若当座ノ首長_ス人用之_ヲ、余人ハ不_レ書_レ之也。

陪字者、用心_ス字_ヲ之時書_レ之也。

心製者、禁中。心令者、后宮。心教_ニ者、親王家也。

一首者、書否有人ノ晴_ニ賦、其ノ詩一首_ト書_ハ成_マ也。

官姓名等者、随_テ次_ニ第_ニ略_ス之。於上字_ニ禁裡ノ外一句不書之。

即_ハ事_ニ山寺会無題ノ詩_ニ書之_ヲ。答_ハ言志書也。

卷第七（8ウ）

次書詩事 於四韻詩六行三字_ニ書_ク之_ヲ。所謂九字五行八字一行、如此書。自然_ニ三字_ニ余也。八字行也用第四ノ行_ニ尤宜。疊字

等不被書切也。又結行_ニ書八字_ヲ常ノ事也。於_テハ当座ノ会_ニ、以一句_ヲ為_ス一行_ト並書七字_ヲ也。六韻已上乃至十韻一百等、不及_ニ沙汰_ニ無量也。

詩披講事 作法准和哥_ニ可_レ知之_ヲ。高声指声読也。

先講声。次詠声、律ノ曲也。今ノ朗詠曲是也。次頌声、呂曲也。

今ノ朗詠佳辰令月曲也。

重会紙等乃至講師読師作法、皆如_レ和哥。

卷第八

聯句事 避声居_レ韻次第可_レ准_ニ知詩_ニ一也。大旨五言也。二四不

同二九对也。又七言連句_マ間々在之。大唐此事、所謂

朝_{（候カ）}侯_{（ヒタ）}日高冠_{（ヒタ）}額拔_{（イソカハシ）}夜行砂厚履声_{（イソカハシ）}忽_{（イソカハシ）}

等比其例也。（9才）

略頌曰、執筆・発句・亭主・入韻云々。尋常会大旨用巡句云。

巡句者、於一人不用半句（一句・三句等是也）、必用重句也

（二句・四句等是也）。

卷第九

避同字事 於花月等明字者、於一折面三字云々。於詞字強不嫌之。

用对事 文筆同用之。秘府論等雖有多種常用八对。

字对者、天象・地儀一類对也。日与月、山与河類也。

色对者、青・黄・赤・白・黑等類也。此猶字对也。

員对者、一・二・三・四等一類也。此猶字对也。

片对者、人与鐘、大与羯、如此以篇对、曰也。(口片并力) (9ウ)

異对者、天与地、於如此惣篇目字各对異類、故曰異对也。

音对者、男与北、女与南、如此借音对也。

義对者、雪与鳥、黑与鸞等、以黑白之義对也。一切准_レ知_レ之。

量对者、(或重对)、風颯々、月蒼々。

花鳥对者、於雪月花明物、通可对也。

卷第十

分字部類事

天象〔又乾〕〔或此内分歲時部也〕日月・風雲・時節・年候

等一類也。

地儀〔又坤〕〔或此内分居所部也〕山河・林叢・家門・牆壁

等一類也。(10才)

植物〔草樹〕松柏・蘭菊等類也。

動物〔或此内分魚虫等部也〕牛馬・鳥鵲・螻蛄・鯉鮒等一

類也。

人倫 仏神人・男女・父母等一類也。

人体 眼・耳・鼻・舌等一類也。

人事 仁義・礼智・病喜・貧福等一類也。

雜物〔或此内分宝貨・服飾・乘御也〕金銀・珠玉・錦繡・車

船等一類也。

飲食 飯・汁・餅等一類也。

光彩 赤白・紅紫等一類也。

方角 東西・横縦・左右・上下等一類也。(10ウ)

員数 一二・複単等一類也。

詞字 去來・進止等一類也。〔聊相乱人事也。〕

重点 颯々・蕭々等類也。

量字〔此内在異訓量字・詞量字・双貫量字等也。〕

異訓量字 遮莫等類也。

詞量字 恐惶等類也。

双貫量字 山河等類也。

人名 三国人名也。

処名 三国名処也。

詞字・重量字・人名・処名、強不用字对也。(11才)

本云、得度転之(マ)說本、致推量之罵切、於愚儒之舛誤、侯君子之添削耳。

卷第十一

志道重書之予(ママ)、多視文筆之体、頗載枝葉之詞。而今、於此一巻之書者、勝百鎰金哉。呈儒術之奧蹟、覺庸才之淺知。尤可秘々々、勿令忽矣。

或本云、題目ノ句ニハ用題ノ字ヲ、破題ノ句ニモ用題ノ字ヲ、共ニ以テ有例事。暫結句ニ題字ヲ例。

花有淺深云題 菅家御作云

蘭ハ為ニ送ニ秋深紫結 菊ハ依テ臨ニ水淺黃凝 是也。

発句ノ不ニ必ス載ニ尽題ノ字ヲ事、句題ノ詩ニハ者、発句ニ悉載尽題ノ字ヲ、是常ノ例也。又有不尽之例。(11ウ)

蜚声入レ夜ニ催ニ題 順詩ニ云

蜚ノ声切々夜漫々 歛テ枕ヲ聞ハ還テ忘玉箱一

入催之両字不作之ヲ矣。

発句ノ対事、多ハ不レ対レ字ヲ。而

雨来花自綻ト云題 藤鷲茂

片々雲膚遮漢ニ合フ 蕭々雨ノ脚纔ニ檐ニ飛

発句ニ不レ用ニ題ノ字ヲ、用同読他ノ字ヲ事、発句ハ皆作ニ載題ノ字ヲ其ノ字ヲ不レ可レ替フ。而、

春雨洗花顔云題 源英明

春雨ニ何因テ細脚頻 為ニ過ニ花面一洗フ紅塵一
以面ニ賛顔ニ以テ為例ト而已。

発句ニ重用同字ヲ事(13オ)

水先秋冷ト云題 江ノ以言詩云

水氣自教ニ冷寒ヲ通 先レテハ焔ニ忽ニ怪ム与レ秋同コトヲ

氣・秋字也。蓋夫一句ノ中犯ニ念一ノ病ヲ、然モ而定ニ名

詩ト矣。

発句并ニ胸臆句ニ用同字ヲ事、一篇ニ不作同字ヲ、是麗体者。

春雨洗花顔題 源英明

花情若聽吾微誨 花持妖姿妄折人 是也。

花字既有二、以是為証拠。

卷第十二

余情幽玄体 清風何ニカルト云題ニ

庶人ハ展レ簾ヲ宜相待

刊子ハ懸テ車ヲ不往還

又花ハ寒蘭菊ノ点叢題ニ 菅三品(13ウ)

蘭蕙苑風摧紫後 蓬萊洞月照霜中

是等誠幽玄^レ之體也。作文士熟察^{此カ}比^レ風情^ヲ而已。

破題體 宮鶯囀曉光題 萱三品

西樓月落花間曲 中殿燈殘竹裡音

是每句破題也。

似物體 天淨識賓雁題 菅家御作

碧玉裝簪斜立柱 青苔色紙數行書 是也。

題意彷彿體 秋未出詩境題 紀齊名

本不置閑城終去 縱無歸路欲妨行

結句述懷體 霜葉滿林紅題（12才）

紅林實有重青日 素髮視無更綠春

双閑體 秋声脆管絃題

落葉響隨孤竹乱 長松韻逐七糸輕

竹是管也。糸是絃也。是則管与絃上下句別作。每句如此。

卷第十三

句中對體 秋夜作 江以言

林叢唯任蕭条也^{色カ} 九月纔殘三日光

林叢・蕭条、九月・三日是也。

声對體 香乱花難識題 江相公

若非百松籠中透 實是梅檀浪底沈

百与梅是也。（12ウ）

側對事 滿月如^{ト云}鏡^ニ題^ニ 平佐幹

光清^{テハ}不^レ弃^レ青銅^ヲ冶^カ 影散^ニ更疑^ニ百鍊^ノ消^カ

青与百對也。百白作有之故也、是也。

數對并次^{ツイツル}字、強^{アナカチ}不對事 王昭君詩云、

胡角一声霜後^ツ夢 漢宮万里月前^{モノヲモフ} 腸

声与里不^レ對、是也。

方角對事 山中述^懷

商山^ニ月落^テ秋^ノ鬢白^{韻厭} 頻水波揚左耳清

秋是西、左是東右、方之對、是也。

人名對事 橘在列

陳孔章^カ詞^ハ空餘^{イヤ}病 馬相如^カ賦只凌^レ雲^ヲ

凡不^レ限^ニ人^ノ名^ノ對^ニ總^テ名^ノ之時^{ニハ}未^三必^シ求^二對^ノ字

一。世間出世間・内典・有情非情等准以^テ如此矣。

（14才）

人名与何公對事 「雨」晴^{ニト云}對^ニ月^ニ題^ニ

親對儉言玄度^カ友 高登^テ漫^ニ疑庾公^カ樓^{カト}

以^二テ玄度^一對^二庾公^一、是也。非對字^一也。

抑近來詩^レ體、二四不同二九對、五言是也。二六對、七言也。

下三連計去之ヲ、在^二先達之口伝^一耳。妄以^テ不可推量愚案等
一、能々向^テ先達^一必可^レ察之而已。為弘風月之情、今默^(点カ)文筆
之體、於愚拙之誤^(マセ)儒、侯賢才之考而已。

卷第十四

賦事〈題目下之裡書之〉

或本、賦是雖^レ言^ト古詩^ノ體^ト、玉章皆納^二此中^一。更^ニ無^二別^一大
體^一。頗以^(マセ)意^ヲ不可推量^一。必可問^二先達^一、定有^二口伝^一歟。

発句 粵^{コ、ニ}云^{コ、ニ}予異口同音 臣聞 等也。施頭一・二・
三・四字、無對也。

傍字 当知 就中 既而 然後 于時(14ウ) 等也。発句之次
施之。

〔壮句〕 三字^ニ有對^テ調^レ聲^ヲ而已。壮句但詩序未^レ用^レ之。

壮名句 春華鮮 秋月朗 雲眇々 月蒼々

緊句 或^ハ胸、或^ハ腹、或^ハ腰。有對調^レ聲^ヲ。

緊名句 椒房華朝〈平〉 蘭殿雪夜〈仄〉

長句^ハ、或^ハ頭、或^ハ腹。賦猶施腹^ニ。從^レ五字至^レ九字或^ハ十余字^ニ、

有^レ對^テ調^レ聲^ヲ。或^ハ云、長句^ハ從^レ五字或^ハ十余字、二句^ヲ為^二
一句^一ト、平他去^レ之^ヲ。必不去之^ヲ六字^ノ句。

長名句 金商七月之候〈仄〉 銀漢二星之期〈平〉

隔句 避聲事、自平声起平他々平、或說多。又未必去之。自他
声起他平々他。此外或十字。

隔名句 梵唄^(梵カ)播^二聲^ヲ於^二編^一法界之風^ニ (15才)

幡蓋^ハ飄^ス影^ヲ於^二尽虚空之霽^一 (仄) 淳茂

或十一字、所謂是也。

排^{ヲシテライテ}月窓^ヲ以^二仰^一天人師^ヲ於^二其^ノ際^一 (仄)

卷風幌^ヲ以^レ崛^ス龍象衆^ヲ於^二其^ノ前^一 (平) 萱三品

或十四字、審為見粵。

紫^(紫カ)霍^ス殿之皇居^{ニハ}七廻書^ニ賢聖^ノ之障子^一 (仄)

大嘗会之宝祚^{ニハ}兩度黷^ス画圖之屏風^一 (平)

抑古賢何必^ニ此^ノ句^一ヲ定^ム長句^ヲ哉。皇居^ノ字・宝祚^ノ字、
為^二終^一ノ字^ト。若^ハ七廻字・兩度^ノ字、雖為^二上句之終^一ト、已

足^レ去^レ聲。頗可^レ謂^二雜隔句^一ト。縱雖不得去聲^ヲ、輕・重・

疎・密・平隔句尚^ヲ未必去聲^ヲ。何況今足^レ去^レ聲、須謂^二雜

隔句之異名^ト。仍所^レ定非^レ無^レ不審^一矣。

重隔句 東岸西岸之柳〈仄〉 遲速不同〈平〉 (15ウ)

南枝北枝之梅〈平〉開落已異〈仄〉保胤

疎隔句 山復山〈平〉何工削成青岩之形一〈仄〉

水復水〈仄〉誰家染出碧澗之声〈平〉朝綱

密隔句 山排復野排〈平〉日曝紅錦之幅ワ〈仄〉

門柳復岸柳〈仄〉風繞^{ワカス}麴塵之糸〈平〉齊名

平隔句 眼、前之万事〈仄〉逐^テ歲^ヲ以雖^レ變^{スト}〈仄〉

耳、底之一言〈平〉隨^テ日^ニ以難^レ忘^{スト}〈平〉

雜隔句 或^ハ上^ハ十^ハ下^ハ八、或^ハ上^ハ多^ハ下^ハ少、或^ハ上^ハ少^ハ下^ハ多、員數

不定。或^ハ上^ハ十^ハ余^ハ下^ハ不同也。

漫句、或^ハ施頭、^ニ或^ハ尾、或^ハ代、^カ送句^ニ。四五字、七八字、

或十^ハ余^ハ字、無^レ對^レ不^レ調^レ聲^ヲ也。(16才)

送句 如件、如斯、畢乎、是等也。施尾、一・二・三字、無^レ對。

此地之為体也、何^ソ唯淳風坊中、一、河原、院哉。

卷第十五

一雜序賦 願文等^ニ有二病。一、長短、病、二、上尾、病。長短

ノ病^{トハ}者、片句^ハ、長^カ片句^ハ、短、是也。上尾、病^ハ者、小異^ニ詩、病

ニ、詩^{ニハ}必他^ト平々他^ト避^レ之。雜筆^{ニハ}必壯句・堅句^(緊)・長句上

下句終不^レ用^ニ同聲^一。

置焉矣字事 為避聲者、所謂是也。

妄風起^テ性海^ニ焉^ハ〈平〉漸動^ス流轉^ス之浪^一 仄

罪塵積心地^ニ矣^ハ〈仄〉屢成^ニ感障^一之山^ヲ 平

為避聲^ヲ足^タレ^{サン}字^ヲ也。又^ハ為^ニ送句^一也。為足字^ヲ者、

一二年來能事畢矣。(16ウ)

句題 唐家詩^ハ隨^レ物^ニ言^テ志、曾無之。我朝又貞觀以往多以如

此。中古以來好^コムト句題^ヲ云々。或^ハ云、此四句云律詩也。

卷第十六

律詩事 或本云、調聲事^ハ能調^ニ平他^ノ聲^ヲ之義也。平声之外上・

去・入之三声^ヲ總^テ謂^テ之^ヲ他^ト。隨^ニ四声^ニ詩^ニ避聲^ヲ調韻、謂^レ之^ヲ調聲^ト也。

終字事 凡上ノ句、終ノ字、必他聲也。但於^テ發句^ニ者不定也。用

レ連韻^ヲ法之時、平声也。不^レ爾時^ノ者他聲也。下ノ句、終ノ字、

平声、韻ノ字故也。上古之時、用韻^ヲ不定、或^ハ用平或用他聲^ヲ。

近來^ハ不然、以^テ平^ヲ聲^ヲ為^ス韻^ト耳。發句・落句無^レ對、結句中

ノ二句也。有對聲也。

調聲事 若五言詩^{ニハ}二四不同^ニ九對。謂、若^ハ上ノ句若^ハ下ノ句、

第二与第四平他底不同、謂^レ之^ヲ二四不同^ト。上ノ句第二ノ字与

下ノ句ノ第四字ト必応同声、謂之ヲ二九対ト。毎レ句如此ノ。若
七言ノ詩ニハ、二四不同二六対。謂、若ハ上ノ句若ハ下ノ句、第
二与第四平他不同如此、第二第六同声也。毎レ句如此。

四韻句事

發句ハ題目ノ字ニ加テ余ノ字ヲ不時意趣ヲ如ニ題目ノ言之ヲ也。

胸ノ句ハ破ニ題彰ニ其ノ意ヲ也。謂之ヲ破題ト。

宮鶯囀ト曉光ニ題ニ曰 萱三品 (17才)

西楼ニ月落花ノ間ノ曲 中殿ニ燈殘テ作ノ裏ノ音

腰ノ句ハ述ニ事ノ之氣味ヲ也。謂ニ之ヲ比興ト而已。或ハ用ニ本文
一。比興ノ之体、

天淨 識ト云 寶雁一題ニ曰 萱家御作

碧玉裝簪斜ニ立ニ柱 青苔色紙數行書

落句 若寄ニ時之景氣ニ、若拳心之所ヲ在ニ以述ニ其ノ志ニ
也。

双貫事 (或本云、所謂是也)

草樹暗迎春題曰

春ノ生ニハ 無レト 跡漸從ス東 草樹相迎暗ニ至ル中

向レ暖ニ因縁ハ唯媚緑 尋レ陽ヲ媒介是柔風

庭ニハ 増ニ朱色ヲ晴ノ沙ノ緑ニ 林變容輝宿雪紅ナリ

芳艷不レ知何ノ処 契ル 誰教ニシテ計会ヲ一時ニ通セ

卷第十七 (17ウ)

詩六義部

一風 風ハ者、教也。鑽仰テ賢聖ニ詠述遺風ヲ、是ヲ等而已。

二賦 賦者、鋪也。賦之言、鋪也。直ニ鋪陳テ改ニ善惡ヲ、
是也。

三比 比者ハ、不直ニ言ニ時ノ政之失ヲ、取ニ比類ヲ而言、或云
比物ニ也。

四興 興者、直ニ言ニ時ノ政之美ヲ、取テ善ヲ喻レ之ニ謂也。

五雅 雅者ハ、正也。言テ今ノ之正シウ道ヲ可為ニ後代ノ之法ト也。

六頌 頌者ハ、誦也。今ノ德政、美盛德ノ之形容ヲ、是也。

卷第十八

詠史事 (或本云、所謂也)

資父事君 (18才)

懷忠偏得意 至孝自成レ人ト

拔レテ白何輕レ死 含レテ丹ヲ在顯親ヲ

王生猶有母 曾子豈非臣

卷第十九

四六文章体（19ウ）

発句 茲審 伏惟 夫以 竊以 共惟 方今 於是 觀夫

于時 汝当知 蓋聞 夫 維

施頭、一・二・三・四字、不要对、蓋如是。字句未必限

発句、只出大体也。

傍句 斯廼 然而 是於 將以 于時 誠是 何必 可謂

就中 等也。故 且 抑 可用是等者也。

壮句 三字、用对。発句之次用之。調平仄也。

微霰零 密雪下 有畛畦 無涯涘（20才）

緊句 四句二句、可調平仄也。

三陽交泰 万彙敷榮 進寸退尺 跋後寔前

長句 自五句^{（字力）}至九字也。或十字、用对、可調平仄也。

五字 上方之三応（仄） 東序之両雄（平）

六字 逢法歲之新時（平） 修山門之旧例（仄）

七字 已知君世字無用（仄） 何堪守務而有裨（仄）

八字 携牌於午磬之已息（仄） 秉私於昏鐘之蓍鳴（平）

九字 雖对聖賢於薰卷之中（平） 焉厠龍象於縑衣之列（仄）

十字 十一字 十二字

十三字 論其法材（平） 則^{（東力）}東^{（重力）}學 範參寥而為一（仄）

謂其道価（仄） 則並惡^{（重力）}崎濟北而為三（平）

十五字 伝命之甚嚴（平） 也今晨逢三大士之勸誘（仄）

伸辞之不逐（仄） 也此夜輪^{（揚力）}都會之舉場（平）

隔句 真体、輕々・重々・疎々・密々・平々・雜々也。（20

ウ）輕々重々、為最^{（也力）}々。疎・密次之、平・雜次之。

輕隔句（上四字下六字） 惠日之光（平） 至七葉而增耀（仄）

法燈之照（仄） 騰百代而弥明（平）

重隔句（上六字下四字） 積羅窓三余暇（仄） 猶語^{（重力）}漢篇（平）

欠葱嶺万里遊（平） 還報^{（重力）}梵篋（仄）

疎隔句（上三字下七字） 蓋未必限七字、自五至九字亦不

妨也。

密隔句（上七字下三字） 蓋上七字、不以七限、自五至九

字亦不妨也。

平隔句 上下齊等也。或五・六・七・八・九。

雜隔句 上四字、下五・六・七・八字也。

或下四字、上五・七・八字。

或上五字、下四・六・七・八・九・十二字也。

或上六字、下五・六・七・八・九・十字也。^(マ)

或上七字、下四・五・六・八・十一字也。(21才)

或上八字、下四・五・六・七・十一・十二字也。

或上九字、下四・五・六・七・八・十一字也

或上十字、下四・五・六・七・八・九・十一字也。

或上十三字、下七字也。

謾句 四・五・六・七・八・九・十余字也。或施頭、或施尾、

或代送句。不对、不調平仄也。若幸而相逢其韻者、亦不妨也。

送句 秉扨上 憑上方 權柄旋 乾坤去

施尾、一・二・三字、無对、或有对。 者也 而已 者与

哉 者 耳

景 景者、時節之句也。

存 存者、我存句也。

取 取者、答嫌心句也。

与 与者、又上々讓句書也。

公 公者、公案之句也。

謝 謝者、上贊句也。(21ウ)

四六文章体格

索話

蕉^(焦カ)尾於菟 搏噬^(焦カ)当途 有軫身策 一任將鬚

提綱

山前一片閑田地 不籍耕耘無灌溉^(灌溉カ) 中有青々貫歲寒

〔韻〕 時人唯作竹松看〔韻〕 有吟畦無〔涯〕岸〔韻〕

長句 左顧則水流花開 右眄則松老右欄^(右欄カ) 〔韻〕

〔漫句〕 無端二千年前 竺乾有火顛預^(火カ) 〔韻〕

名為円覚伽藍 以四聖六凡 一齊繫絆〔韻〕

老々大々 至他^(死カ) 無知其界畔〔韻〕

〔緊句〕 後代兒孫 謾〔恣〕盜悍^(食カ) 〔韻〕

〔長句〕 或壳于蠟人 或博于鉄彈^(鉄カ) 〔韻〕

緊句 踏著不知 誠可惜歎〔韻〕

謾句 秉扨上坐 今夜借上方龜刺梨 試為部判〔韻〕^(判カ)

以主丈画一画之^(云カ) 唯聞四面凱歌声 何必鴻溝分楚漢〔韻〕

謝詞〔某〕

緊句 若^(若カ)甗^(凡カ)瓦器〔仄〕 樸藪散材〔平〕 (22才)

長句 取為自躍之金〔平〕 甘作不鳴之雁〔仄〕

雜隔句 躍禹門之三級〔仄〕 恨莫攀^(恨カ)連化之鱗^(連カ) 〔平〕

棲漢苑之一枝〔平〕 但擬息倦飛之羽〔仄〕

長句 常記孟浩然之多病不才之句〈仄〉

曾畏孝宣(帝力)旁之脩(脩力)名責實之言〈平〉

長句 適屬保社之欠人〈平〉 誤當大藏之驅蠹〈仄〉

〔長句〕 已知居世而無用〈仄〉 何堪守務而有裨〈平〉

〔長句〕 恨稟周利之愚〈平〉 剩負慶喜之任〈仄〉

重〔隔〕句 冲燕雀於遙漢〈仄〉 雖翥豈翔〈平〉

策驚駘於嶮塗〈平〉 屢跪且躡(跪力)〈仄〉

〔傍字〕 爰

長句 〔上方之三応〕 東序之両雄

〔長句〕 逢法歲之新時〈平〉 修山門之旧例〈仄〉

〔長句〕 携牌於午磬之已息〈仄〉 秉杓於昏鐘之(音力)發鳴〈平〉

緊句 聽命悚兢〈平〉 且驚且悸〈仄〉 (22ウ)

雜隔句 進鼓談舌〈仄〉 元乏靈嵩之(金力)金機〈平〉

退開辭唇〈平〉 又恐叢林之闕典〈仄〉

緊句 事不終否〈仄〉 黽勉就班〈平〉

長句 私恥輸于公儀〈平〉 狐鳴憤于猓吼〈仄〉

緊句 納敗一上〈仄〉 請許徇狂〈平〉

發句 伏惟堂上老師

緊句 風度凝遠〈仄〉 器才翹英〈平〉

長句 挺高朗邁往之姿〈平〉 秉剛毅不回之操〈仄〉

雜隔句 謹嚴而樂易〈仄〉 故土可近而不可得親〈平〉

寬裕而疎明〈平〉 故人知愛而不敢不畏〈仄〉

長句 論其法材則束覺範參寥而為一〈仄〉

謂其道倆則並(德力)葉嶠(德力)濟北而為三 (23オ)

輕隔句 惠日之光〈平〉 至七葉而增耀〈仄〉

法燈之照〈仄〉 騰百代而弥明〈平〉

〔傍字〕 只願

輕隔句 寿而且康〈平〉 積ツム甲子於七百〈仄〉

老而益健〈仄〉 開槌(ツム)於晨昏〈平〉

〔緊句〕 言不能周〈平〉 心猶有蓄〈仄〉

發句 次惟 山門両序 上方諸侍〈仄〉

緊句 珩璜晋宝〈仄〉 杞梓楚材〈平〉

長句 接珍羽於駕行〈平〉 列飛翰於雁序〈仄〉

〔長句〕 名不求而自至〈仄〉 道欲晦自倍光〈平〉

〔長句〕 下彼梁宋之姿〈平〉 附此橫梅之用〈仄〉

〔長句〕 畔(不審)遭引平之携(手力)〈平〉 居摩(肩力)扇之列〈仄〉

〔長句〕 知鵬鷖之交翥〈仄〉 恥驚驥之並馳〈平〉

〔長句〕 若無謝拜之趨於凌晨〈平〉

爭顯懇礼之殘於今夜〈仄〉（23ウ）

緊句 更闌坐久〈仄〉 卷而懷之〈平〉

送句 而已

拈提

方丈拳阿難問迦葉伝金欄公案。

拈云、阿難曾道、將謂如來惠我三昧。故至于此致斯問〔端〕。

惜哉、迦葉不卸下衲衣痛与一拳、只如上方老人賦物。見在請說破、作麼生。提露去也。

桑畦雨過羅紈賦 麦隴風來餅餌香

冬至索話

孟明子韓信 焚船背水 詭計相仍 革命義拳 誰是先登

提綱（24才）

釈迦不説々〈韻〉 晋文不正而謫〈韻〉 迦葉不聞々〈韻〉

蕭何不戰而歟〈韻〉 將頭不猛累及三軍〈韻〉 緊句 遁代相承

列隊成群〈韻〉 王道不興霸業惟勤〈韻〉 偏捩一方〔絶〕

信并汾〈韻〉

輕隔句 法王姦生〈平〉 已揚僧堂之勝〈仄〉

德欠變見〈仄〉 早書觀台之雲〈韻〉

平漫句 殊不知衲僧家

長句 不隨陰陽之復剝 不帶元炁之氤氲〈韻〉

傍句 說甚 某更希

緊句 灰飛葭管 錦添繡紋〈韻〉

送句 秉杓上座憑上方 權柄旋乾轉坤去也〔拈主丈卓一下云〕

夜來細把梅花看 春在枝頭已十分〔韻〕（24ウ）

叙謝

緊句 進寸退尺〈仄〉 跋後蹇前〈平〉

〔緊句〕 少而抱痾〈平〉 衰而待老〈仄〉

輕隔句 生涯寂歷〈仄〉 冷於楓落之江〈平〉

平居僻幽〈平〉 廢於菊荒之徑〈仄〉

重隔句 積蘿窓三余暇〈仄〉 猶暗漢篇〈平〉

欠葱嶺万里遊〈仄〉 還報梵籟〈仄〉

輕隔句 以務守司〈平〉 僅驅蝕書之蠹〈仄〉

無機号用〈仄〉 爭酬問〔字〕之僧〈平〉

長句 常懷日暮道遠〔之〕慮〈仄〉 則負任重人微之誦〔平〕

長句 適當壳被買牛之時〔平〕 叨応拈杖振拈之役〔仄〕

長句 伝命之甚嚴〔平〕 也今晨逢三大士之勸誘〔仄〕

伸辞之不遂〔仄〕 也此夜輸一都会之拳揚〔平〕

重隔句 持鼓以過雷〔門〕〔平〕 先慙拔短〔仄〕

乘槎而問銀漢〈仄〉 祇覺天高〈平〉 (25才)

緊句 狂簡之情〈平〉 伏增戰越〈仄〉

謾句 恭惟 堂上 老師

長〈句〉 皎亮而純明〈平〉 恢宏而博達〈仄〉

輕隔句 黃鐘太呂〈仄〉 烝函天地之和〈平〉

十二月十二月
璞玉渾金〈平〉 稟得山月之正〈仄〉

長句 抱過人之遠識〈仄〉 擅絕俗之高標〈平〉

雜隔句 誦汗牛充棟之書〈平〉 用不專於紙墨〈仄〉

開鍊仏鍛祖之治〈仄〉 妙只在於鉗鎚〈平〉

輕隔句 四衆成林〈平〉 莫不霑於雨露〈仄〉

万柄是草〈仄〉 皆自偃於德風〈平〉

長句 人道法寶藏之所歸〈平〉 我思仏鑑道而可作〈仄〉

〔傍句 更希〕

輕隔句 檀施雲委〈仄〉 見猗頓之傾倉〈平〉

年力
法算爭延〈平〉 聞龍猛之授業〈仄〉 (25ウ)

緊句 懇惓之至〈仄〉 倍万恒情〈平〉

謾句 又惟 山門兩序主

緊句 受材卓爾〈仄〉 盲德粹然〈平〉

長句 登空驥之群〈仄〉 屢賁鵷鷺之列〈仄〉

雜隔句 壅培而滋厚〈仄〉 杞梓見凌雲之姿〈平〉

追琢而早成〈平〉 璫璵有造器之用〈仄〉

緊句 儼然排立〈仄〉 每各殊觀〈平〉

雜隔句 漏鼓〔告〕更深〈平〉 請坐体〔色〕糊之訥〈仄〉

粥鯨吼曉冷〈仄〉 願趨猷袖香之誠〈平〉

緊句 荒斐之詞〈平〉 凡百賜忠〔忠〕〈仄〉

拈提 (26才)

方丈拳二老宿長一線々〔々〕長公案。

頌曰、長鬚弘雪斫柴來、赤脚和霜拾葉回、尊丈蘊崇則行火、

煙消燄尽也無灰。

索話結夏

人間尽道已春迴、翰苑花迎法歲開、若以黃連釀石〔密〕、不妨

團聚黑蜂來

提綱

靈山一枝少林五葉〔韻〕 不紫不紅無牙無孽〔韻〕

長句 合十世古今為一春〔平〕 統虛空法界為籬落〔仄〕

緊句 苾々芬々 猗々曄々〔韻〕

長句 是則円覺伽藍〔平〕 亦名華界〔界〕宝刹〔平〕 (26ウ)

謾句 無端有沒意智老瞎禿〔韻〕

平隔句 (拍力) 拍其採摘〈仄〉 謂之護生〈平〉

警其移栽〈平〉 謂之禁足〈仄〉

〔傍句〕 殊不識〈仄〉

雜隔句 一三四七〈仄〉 処々分支而不傷其根〈平〉

此土西天〈平〉 紛々取味而不損其萼〈仄〉

謾句 〈拈主丈卓一下云〉 上方拄杖子 耳朶無檢束〈韻〉

緊句 剗地〔出〕來 呵々笑曰〈韻〉

傍句 与麼說話

緊句 擒錦鋪繡 榆楊文墨〈韻〉 只事浮花 易若貞实〈韻〉

謾句 秉弘上座輕輕对他云〈27才〉

割尽黄雲稻正青 (練力) 練成白雲桑重綠〈韻〉

索話 〈東福寺出姦座〉

〈拈主丈云〉 手把如意〈卓一下々〉 擊碎珊瑚〈靠之〉 收拾片

屑 皆尽陶朱

提綱

平隔句 機先提持〈平〉 堂前滋草〈仄〉

格外拳唱〈仄〉 甌裡生塵〈平〉

長句 (猛力) 俗麼呈露將去 未免宗風墮湮〈韻〉

傍句 直須

緊句 按下雲頭 歷艱味辛〈韻〉

〔傍句〕 所以

長句 嵩山深雪之中有得髓一个 不乖 汾州苦寒之地出成器六人

〔韻〕 〈27ウ〉

傍句 雖然我東福寺門下又且不是

緊句 三陽交泰 (方力) 万彙敷榮〈韻〉

(調力) 蕩然和炁 坐樂昇平〈韻〉

〔傍句〕 且道以何為驗

〔長句〕 座中尽是桃源客 何必別 (重力) 論洞裡春〈韻〉

拈提

方丈拳乾峯示衆一不得拳二公案。

拈云、乾峯恰如酷吏臨小民。不啻籍没家財、殆乎食其肉。雲

門唯抱簿并 (重力) 祖而已。幸逢堂上老人、削防火之禁、布儲水

劣之合。秉弘上坐因而得歌曰、 (平力) 子生無襦今五磅。〈28才〉

助辭隔于字体類

於〈于也。声相近也〉

歎〈歎也。出炁歎悲泣氣咽而狎息〉 (拙力)

於〈歎詞也〉

噫〈恨声歎也。不寤之也〉

胡〈何也〉

嗚呼〈招呼、歎息之辭也。作於戲也〉

嗚呼〈歎所異也。嗚呼・於戲、通用之也〉

歎〈疑辭也。又難辭。通作与、執之辭也〉

于〈於也。象炁之舒。試言于則口炁兼平出也〉

惡〈不安於事之艱辭也〉

盍〈何不也〉

夫〈語端辭也。疑辭、又有所指之辭〉

諸〈辭也。別異之辭也。又疑辭也。語助也〉

也〈語之也。決辭也。凡言也〉

而〈假借為語助又之辭、又發端之辭也〉

兮〈語有所稽也。歌辭也〉(28ウ)

則〈助辭、又然後之辭也〉

者〈別事詞也。分別隔異詞也。又語助凡為者^(ママ)簡是

哉〈言之間隔辭也。又疑辭也。語助也〉

矣〈決辭也。已辭也〉

邪〈語未定之辭也〉

耳^(ヒカ)〈語也。辭也。而已同也〉

焉〈何也。語助之、假借為一〉

否〈塞也。物不可以終一。惡也。滅也〉

已〈養里反、此也。甚也。訖也。又語終辭也。矣字同意也〉

已〈象鹵反、已也。陽炁已出陰炁已藏也〉

己〈荷起反、己中宮也。又身也。對物而言曰彼、己作已誤也。〉

乎〈語之余也。矣・乎・摩、同疑辭也〉

焉〈何也。語終辭、決辭也。豈也〉

只〈語也。辭母也。止同、必也〉

是抑与〈語之助也〉

且又那凡〈說不見者也〉

烏〈一有〉

其〈語已辭、疑辭、去声也〉(29才)

爾而已 爾云 者也 者与 哉者

矣耳焉也〈決辭也〉

乎歟耶哉夫〈疑辭也〉

大 内封 謹上 某親〈尊前〉

姪孫 某 狀封

唐 外封〈平安宗書付拝上／某州某県姓某官〉 姪孫具位某謹重封

書 内封 謹上 某親〈尊前〉 孫〈子則之男〉 某 狀封

札 外封〈平安宗書百拝上／某州某県姓某官〉 孫 某謹重封

之內封 書拜上 幾兄（座前） 弟 某伏封（29ウ）

封 外封 〈平安宗書付拜上／某州某県姓某官〉 弟 某謹重封

遣 賀僧新枝剃祝髮、已諸宗風盡披、伏惟、贊賀首座堂々頂相

入清淨、自此把第蓋頭、不勝喜躍之至

答 濫膺落髮、叨獲空身、求通黃梅機関、安識丹霞了悟、只憑

檀越、強作葫蘆、喚上禪壇知恩有自、歸來答報德無窮

〈本云〉此書先年以正本書写、雖然依回祿之災、一時燒却了、

重書写之。謬舛惟多、宣俟貽誚。後來起本、但願俟博達之筆沢

者也。竹溪叟良容（花押）（判似スル也）（30才）

〈本云〉于茲寛永十四年臘月 日書写畢。拾遺菅判（30ウ）

